

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 282 回 先人達の尊い心、「先憂後楽」を思い出せ！

2008.10.26

先日、ある販売会社の社長と話をした。いつになく元気がない彼は、こんな話をこぼしていった。社内会議で、スタッフの企画を積極的に取り上げようと呼びかけると、ただ黙って目を落とし、うつむくだけ。重い口を開くと、できない理由を、誰かのせいにする弁明に終始する。やる気を喚起するために、頑張っている人にインセンティブ(成果報酬)をつけよう！そんな発想で制度化したら、仕事が完了しないうちから、俺の取り分が少ないと申し出てくる。挙句の果てには、少ないのであれば俺は降りる...同じ会社の看板でやっている仕事、勘違いもはなはだしい、と彼は言う。今時のビジネスマンの、プライドとは、一体何なんだろう??

彼らの向こう側には、恐らく、お客様の顔が見えていない。

嘗ての先輩達は...、仮に今は、自分の能力がないとしても、必死にスキルアップして、何とかお客様の痛みを解消してやりたいその思いから、徹夜してでも、何冊本を買ってでも、お客様の心に報いようと努力した。それがビジネスマンの誇りであった。男だったらそんな仕草を、微塵も見せずやり抜いたものである。当然結果、自分自身がレベルアップするのだから、...たぶん、昔の先輩達は、お客様から「ありがとう」の一言を戴くために、その努力は惜しまないという「サラリーマン道」を闊歩していた。せこくない、みみちくない、堂々としたサラリーマンが溢れていた頃、日本には元気が満ち満ちていたような気がする。

「先憂後楽」という、好きな言葉がある。先憂後楽とは、「民に先だって憂え、民が幸せになったのちに楽しむ」という政治に当る人の心がけを説いた言葉で、宋の范仲淹(はんちゅうえん)の名文「岳陽樓記(がくようろうのき)」から出た言葉である。一般的には、天下の副将軍・水戸光圀が造った東京にある「後樂園」で良く知られている言葉である。

小生、この先憂後楽ということは、単に政治家だけでなく現代の企業人としても、是非心がけなくてはならない大切なことだと考えている。当然ビジネスマンとて、時に遊ぶこともある。そんな時でも全く遊びに心を許してしまわず、心は常に先憂ということではなくてはならない。それは言い換えれば、人よりも先に考え、発意、発想することだとも言える。そんな心構えがなければ、お客様の痛みを解消することは、不可能であろうと思う。

昔の中国では、生まれた赤ちゃんに乳をやる前に、まず、酢をなめさせ、次に塩をなめさせる。その次に、苦い薬をなめさせ、次には、とげのあるカギカズラをなめさせる。そして最後に、砂糖をなめさせる。この「五香の儀式」を行ったと云われている。この世に生まれ出た赤ちゃんに、人生は、「酸っぱく」「辛く」「苦く」「痛い目」に会わなければ、甘いものにはありつけないことを、身をもって体験させると言うことであろう。このプロセスを体験しなければ、相手の痛みは分からないかもしれない。

現在の日本はどうだろうか。家庭でも、会社でも過保護に育てすぎる嫌いがあり、従ってちょっと困難なことに直面すると、簡単に逃げてしまう。そのくせ今の若いサラリーマンは、まず、自分達が一番にその「甘いもの」を受けることに懸命になっている。「先憂」があつての「後楽」であること、一度じっくり、考えてみたいものである。